

宇町大領屋兵衛から手水鉢を買取つた時、六人の傭夫が動かし得なかつたのを、半兵衛は引抱へて門外に運び出したといふ。後悪事露顯し、流刑に處せられて家断絶した。

キチジャマ 吉次山 石川郡障川の上流日尾の部落から西北方にある山。高さ七三一米。地質第三紀層。

キチジヨウジ 吉祥寺 珠洲郡吉池に在つて臨濟宗法燈派に屬する。山號は正覺山。貞享二年の書上に、元徳元年紀州由良法燈國師の弟子無印の建立に係るとある。

キツ 木津 河北郡金津庄に屬する部落。この地の砂丘に桃林がある。↓キツノモモ木津の桃。

キツエンブンシユウ 編圖文集 三册。石川郡松任の人三宅邦の詩文集である。跋はその師皆川洪閣の天保癸卯に書いた所である。

キツコウヤ 龜甲屋 金澤森下町に住した染工で、其の祖を興助といふ。興助は天正中河北郡森下に居た龜田岳信の子ともいひ、又寛永十七年金澤で盜賊の爲に横死した龜田權兵衛の遺子であるともいふて、何れが正しいか明らかでない。しかし館紺屋が森下出身の染工であつたことに思ひくらべると、これも亦同地から出たものでないかと思はれる。貞享中金澤紺屋棟取に興助の名が見えるのも是である。

キツシヨ 吉初 ↓キシユウ 吉祝。キツシヨソウ 吉壽 正平四年(貞和五)京師に在つては、光嚴・光明兩院吉壽奏を行はせ給ひ、その吉壽には加賀國御封の解文を用ひられたことが、剛太膳に見える。これ當時の御封があつた爲であるが、特に近年加賀

國の御封の解文を覽給ふ例を開かれたのは、この御封が賞租等の關係に於いて、頗る満足

の状況にあつた爲なるべく、隨つて武家方の勢力の普及を思はしめる。又興國六年(貞和元)光明院の吉壽奏に、能登の國司が不動齋を開檢せんことを請うた申文を用ひられたのも、亦武家方の勢力がこの國に盛であつた一證と見るべきである。

キツテモン 切手門 金澤城内廣式向裏口の惣門で、此の門から土橋門へ往來することになつてゐた。

キツネツガジヨウ 狐塚城 石川郡白見に在つた。越登賀三州志故城考に、洲崎兵庫が越中の領として堡を立て、その徒をして成らしめた。又御神造山の賊魁刀利左衛門別働をこゝに置いたともあると記する。

キツネバシ 狐橋 金澤橋梁記に「きつね橋、主計町と母衣町との間」とある。今その名を失ふ。

キツネヤマコフン 狐山古墳 江沼郡二子塚に在る。前面西方約三一米、高さ五米五、面積一四一五方米の前方後圓塚で、昭和七年一月土砂採集中その石櫃を露出したもの。この石櫃は後圓部に存し、平地から一米八高く、その上部は二米一の土砂に蔽はれ、附近から産する凝灰岩を切石として組合はせられたもので、櫃中に骨格一體を横たへ、副葬品には半圓方格帶神鏡一面・曲玉六・管玉三十三・小玉數十・鍔金飾玉若干・鐵兜一・鐵甲一・長刀六・短刀六・小刀二・鎧三・小銅鎧六等があり、又櫃底に集積せる朱の總量二〇疋に及び、塚の附近から大型の埴輪人形とその破片を出した。同年四月文部省から史蹟として指定せられた。

キツノモモ 木津の桃 河北郡木津の砂丘では油桃を名産とした。栽培の起原は明らかでないが、文政・天保・嘉永頃最も旺であつた如く、明治中西洋種支那種の來るに及んで、遂に之に代へられた。大津繪師『お國名所の中に、わけても名高き木津浦の、桃花のさかりは吉野にまさる。旦那さんは、數多の藝者引連れて、揃ひの手拭、ありやりやんやつとこせ。提重に瓢箪、手にこまざらへ、あゝ松露かゝ。見渡す磯邊に都鳥千鳥ひよい。』みやげにひろふ矢の根石。お戻りや迎船に、焼給茶碗酒とんつく。』

キテイ 淇亭 ↓フタマタヤキテイ 二俣屋淇亭。

キド 木戸 金澤では藩政時代に本町の境界毎に木戸が設けられてゐた。平常は開放せられてゐたが、藩侯の江戸在府中は、夜間大門を閉ぢ、潜り門のみを開き、又非常の際には全部を鎖した。

キド 木戸 鳳至郡山田郷に屬する部落。明治八年十月、本江と併合して本木と改稱した。

キドウカイシン 宜道契心 金澤曹洞宗寶圓寺十七代の住持。雲州の人。延享三年十月越前敦賀永建寺より進山し、寶曆四年二月十一日遷化した。

キドタカトモ 城戸高伴 通稱元右衛門。寶永四年父傳右衛門直正の遺知百五十石を襲ぎ、御馬廻組に列し、御普請會所道具調奉行・神田御前御用人を歴、延享二年同御附物頭並として五十石を加へ、寛延元年金谷御廣式御用に轉じ、寶曆四年七十四歳を以て歿した。

キドヤロクベエ 城戸屋六兵衛 金澤河南町の吳服商人で、本町肝煎列となつた。六兵衛仁心頗る厚く、常に放生を行ふことを好んだ。又屋舎を障川上流に建て、癩馬を收容飼育し、味噌蔵を作り、毎歲味噌五千貫を造つて藩の非常貯蓄用に供し、或は自己の貯金を藩主に献じてその恩を報ずるを念とした。文久二年閏八月十六日歿、享年六十九。

キナシアリヨシ 木梨有慶 通稱左兵衛。天明五年父角兵衛昌數の遺知百五十石を受け、江戸御廣式御用人・御細工奉行より次第に昇進して御先簡頭に至り、文政七年祿百石を増した。

キナシクエモン 木梨九右衛門 元和三年前田利常に仕へて千石を領し、九年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

キナシマサナホ 木梨政直 通稱助三郎。父は九右衛門(二代)。政直は寛文六年その後を受け、御馬廻組に班し、延寶五年加州御郡奉行となり、天和三年組外番頭に轉じ、寶永六年役儀を辭して、翌七年五月五日歿した。

キドタカナホ 城戸高直 通稱七左衛門。前田利長の時御歩として初めて三十石を受け、利常に屬し、御歩小頭に進みて百石を加へた。慶安二年十月十九日歿。子孫世々藩に仕へる。

キドナホツク 城戸直次 通稱七左衛門。慶安三年父七左衛門高直の遺知百三十石を襲いで御歩小頭となり、明暦三年二十石を加へ、延寶五年組外に列し、八年三月七日歿。子孫藩に世襲する。

キドヤチ 木戸谷内 鳳至郡杉平の内の小字。

キドヤロクベエ 城戸屋六兵衛 金澤河南町の吳服商人で、本町肝煎列となつた。六兵衛仁心頗る厚く、常に放生を行ふことを好んだ。又屋舎を障川上流に建て、癩馬を收容飼育し、味噌蔵を作り、毎歲味噌五千貫を造つて藩の非常貯蓄用に供し、或は自己の貯金を藩主に献じてその恩を報ずるを念とした。文久二年閏八月十六日歿、享年六十九。

キナシアリヨシ 木梨有慶 通稱左兵衛。天明五年父角兵衛昌數の遺知百五十石を受け、江戸御廣式御用人・御細工奉行より次第に昇進して御先簡頭に至り、文政七年祿百石を増した。

キナシクエモン 木梨九右衛門 元和三年前田利常に仕へて千石を領し、九年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

キナシマサナホ 木梨政直 通稱助三郎。父は九右衛門(二代)。政直は寛文六年その後を受け、御馬廻組に班し、延寶五年加州御郡奉行となり、天和三年組外番頭に轉じ、寶永六年役儀を辭して、翌七年五月五日歿した。

六年役儀を辭して、翌七年五月五日歿した。